

発行日：2013年10月29日
龍谷大学ボランティア・NPO活動センター

被災地に行って学生は何を学んでくるのだろうか。私たちが行くことに、何か意味があるのだろうか？震災から、2年半がたち、現地の復興が進むにつれ、ボランティアに求められる活動も大きく変わってきました。現地に行った学生は、どんな活動をしたのか、そしてどんなことを感じたのか、を報告します。

■■■■東日本大震災 復興支援プロジェクト ■■■■

2013年度 第1回復興支援ボランティア <8月12日~16日>

8月12日(月)~16日(金)に宮城県石巻市にて、学生30名による復興支援ボランティアが行われ、灯籠流しに関わる作業全般のお手伝いをメインに、地場産業の支援として硯磨きや、子ども達が遊ぶキッズスペースの清掃作業を行いました。どの作業も炎天下での厳しい作業でしたが、誰も文句も言わず、黙々と一生懸命作業に打ち込んでいました。そんな学生の姿に地元の皆さんが大変喜ばれ、昼食時にはスイカやトマトなどを差し入れていただきました。作業の合間には、発災当時のお話や灯籠流しへの想いなどについて語っていただきました。被災した建物が撤去され、更地が広がる風景に、学生は被災地であることの実感がなかなか持てなかったようでしたが、こういった地元の皆さんとの触れあいの中で少しずつ実感を高めることができたようでした。

地元の方が「灯籠流しは、自分たちに残された大切な原風景だ」と学生におっしゃったそうです。その言葉をきっかけに、この幻想的な光景に込められている地元の皆さんの深い想いに気づき、被災によって失ったものの大きさについて考えることができたようでした。

灯籠流しは、人手を多く必要とする作業です。過疎化が進むこの地域でこの催しを地元だけで運営するのは厳しいので、ぜひ、来年もお手伝いすることができればと思いました。人口が減り、高齢化率が60%を超えるこの地域で、この催しを地元だけで運営するのは非常に厳しいと思います。地元の僧侶が灯籠流し直前に行われた法要で、「ボランティアの若者がこうしてきてくれるだけで、雄勝が元気づけられる。」と言ってくださいました。同じ場所に通い続けることに意味があると思います。来年も、ぜひ、お手伝いすることができればと思います。(引率、竹田コーディネーター)

地元の方、ボランティアの皆さんと一緒に、1000基の灯籠をつくりました。



一つ一つ手渡して、灯籠を船に運ぶ



8月14日多くの人の思いを載せて、灯籠を海に流した。地域の人たちが守りたい雄勝の原風景



石巻市社会福祉協議会で、復興に携わっておられる方達の話聞く。貴重な体験だ。

2013年度 第2回復興支援ボランティア <9月27日~30日>



石巻日和山から、海を望む

9月27日(金)~30日(月)に宮城県石巻市雄勝にて、学生31名による復興支援ボランティアが行われました。

今回のボランティアは、石巻市雄勝地区で行われた第2回「おがっスポレク祭り」をサポートすることです。雄勝地区は、震災前は、約5000人が住む海と山に囲まれた自然豊かな地域でしたが、震災により街の中心部がほとんど流されてしまいました。震災後のコミュニティ作りと健康維持を目的に昨年、石巻市

雄勝支所が中心となってこの地域最大のスポーツイベントを復活させたのです。当日は、雄勝地区から離れて仮設住宅に住む住民らを含め、約200名が楽しいひとときを過ごしました。龍谷大学の学生は、テント張り、豚汁作り、競技の運営補助と大活躍、また、いろいろな種目にも参加して、お祭りを盛り上げました。中でもおもしろかったのが、愛の献血リレー。チーム8名が、赤い染料を入れた水を、ワンカップですくって、一升瓶に順番に入れていくという競技です。血液にみたてたお酒をワンカップで、男性陣が上手に一升瓶に注いでいくのです。これは昔からあったずっと続く競技種目だそうです。一番盛り上がったのが綱引きです。「若いの！こっちにきてくれ！」と声がかかり、みんな頑張って踏ん張っていました。「来年もきてね！」といわれて、みんなうれしかったようです。



石巻専修大学の学生と交流
一緒にまちあるきをした

この3泊4日のボランティアでは、震災当時、復興支援の拠点となった石巻専修大学や、たくさん子ども達が亡くなった大川小学校を訪れました。また、石巻市内の日和山に登り、海まですべてが流されている景色を見ました。日常が大きく欠落している被災地では、私たちは自分自身を見つめ直す機会を与えられます。日常から離れ、今、自分に何ができるかを改めて、問い直すことができます。学生は存在そのものが“希望”であり、“夢”なのではないでしょうか。ぜひ、多くの学生に東北に行き、自分の心で感じてきてほしいと思います。

(引率、上手コーディネーター)



大川小学校を訪れて、震災の被害を
実感した



第1回・第2回復興支援ボランティア活動報告会 (10月10日深草キャンパス21号館101教室)

2013年度第1回・第2回復興支援ボランティア活動の報告会を行いました。当日は約50名の参加があり、被災地でどのような活動を行い、どのような出会いがあったのか、そして何を感じたのかを映像を交えて、ボランティア参加者が報告しました。

(以下報告会参加者の感想の一部を紹介します。)

*たった3日間、4日間でも、こんなに感じたり、考えたりするんだ！と、衝撃を受けた。

*復興支援のイメージが変わった。自分の想像とは全然違う。楽しんで、元気を与えることが、支えるになるんだ！

*ボランティアを通じて、される側だけでなく、ボランティアする側もたくさんのことを得ることができる、そんな魅力がボランティアにはあるのだとわかりました。心がときめく、楽しい思い出ができる、っていうのはいいなと思う。

